

た」

英語で行間を読んだり、ニュアンスに応じて言葉を使い分けたりするのはハードルが高い。とはいえ、じっくり勉強する時間はない。

3年ほど前には、海外の社員5人と行うプロジェクトを経験した。ドイツ、インド、イギリス、スペイン、カナダのメンバーと電話会議で議論を戦わせた。

会議では一番に話して 自分の領域へ

「日本語なら前の人の発言を受けて瞬発的に自分の意見を言えますが、英語ではなかなか難しい」

そこで、会議が始まると自分が議論をリードするようにした。「今日のポイントは三つです」と言って要点をまとめながら、自分の有利な領域にもっていく。いったん議論が始まって流れができてしまうと、口をさはむのは至難の業だからだ。

自分の理解が正しいかを確認するために率先して議事録をつくり、参加者全員にメールで送るようにし

た。また、会議が始まる前にはあらかじめ自分の言いたいことをまとめた資料を送っておき、会議の後は自分の発言の意図や本来の意味を補足する。途中で発言ができないときなどは、ファシリテーター役に会議中チャット画面でメッセージを送り、別のアイデアを提案したりもする。

「この会議で何を伝えたいか、何を勝ち取りたいかを明確にすると、どうやって伝えるかがはっきりします」

はじめのころは台本を作って、会議に臨んだこともあった。しかし、文字を読んでしまうと、相手に気持ちが伝わりにくくなる。

「この人はアイデアがある、よく知っている、もっと話をしたい、そう思ってもらうためにはきれいな英語を話すことより、その中身のほうが重要です。そのために、最先端のコンサルティング事例、海外ニュース、各国の事情などリサーチは入念にします。信頼関係ができると、仕事もよい結果につながります」

自身の経験をふまえて、海老原さんは今、次世代のグローバル人材育

成にかかわる。日本、韓国、シンガポールの高校生チームが旅行をテーマにしたプランニング力を競う「TTBiz」の開催、運営を、スポンサーとして支援している。テレビ会議、英語での企画立案、プレゼンテーションの指導をし、コンテストの優勝チームには賞を授与する。

「子どもたちには地球規模で好奇心をもって物事を吸収し、高みをめざしてほしい。グローバルなコミュニケーション力をつけて自分の考えを発信できるようになれば、力を発揮できる場が広がる。世界どこでも活躍できるスーパー人材がたくさん育ってほしいですね」



「TTBiz」のキックオフ会議では、テレビ会議で日韓シンガポールの高校生が話し合った

日本レーザー 技術部 西端幸次さん Koji Nishibata

1977年宮城県生まれ。大学では電子工学を専攻。専門商社を経て、2008年日本レーザー入社。12年から技術部副課長。

英語アレルギーを克服。トラブル 対応の英語はスピード感がカギ

レーザー装置を専門に扱う商社の草分け、日本レーザー。物理学や電子工学の技術に通じた理系の社員が多いが、業務には英語のコミュニケーション力が必須だ。

技術部で副課長の西端幸次さん(36)も、英語でメールをやりとりし、海外出張や、外国人のメーカー技術者のアテンドもこなす。

「メールは言葉のニュアンスを使い

分けられるようになりたいですね。取引先の外国人と仕事以外の話題をどう持たせるかも課題です」

同社は計測、解析、加工などに使うレーザー装置を、ヨーロッパを中心とした海外のメーカーから輸入し、国内企業に納入する。西端さんは、入荷時の製品チェックや、納入した製品の立ち上げや説明、メンテナンスやトラブル対応に携わる。直接、海外メーカーのもとでサービストレーニングも受ける。

とくに、トラブル対応はメールや電話で日々頻繁におこなう。海外メーカーの技術者が来日して納入先に

トラブル対応の3カ条

- ① 専門用語を覚えておく
- ② 返信はすばやく
- ③ 5W1H を意識する

出向くときは、同行もする。

トラブル対応に必要な英語コミュニケーション力の基本となるのは、「専門用語の知識」だ。repair (修理する)、fix (直す)、broken (壊れた)、ship (船便で出荷する)、dispatch (発送する)、deliver (配達する)、procurement (調達) ……。

英語で書かれた技能マニュアルや、英語圏の技術者とのメールのやりとりを通じて、必要な英単語を拾って意味を調べ、記憶する。日ごろから心がけているのは、「すばやく返信すること」。要点のみでも、表現が同じパターンになってしまってもいい。スピードが最優先だ。メールのやりとりは必ず自分の返信で締めくくり、確認もれを防いでいる。

ポイントを簡潔に伝えるコツはメッセージに「5W1Hを含める」ことだ。「レーザー装置が壊れました」というだけでは伝わらない。5Wとは誰(who)、どこ(where)、何(what)、いつ(when)、なぜ(why)、IHはどのように(how)。これを意識するだけで、ぐっとわかりやすくなる。「同じトラブルは二度起こらない」というほど、日夜、予期せぬ事例が起こる。新卒のころは英語のメールを一通送るのにも時間がかかったが、今は苦にならなくなった。

大学時代は「英語アレルギー」だった。外国人と英語で話すなんて、もってのほか。しかし、新卒で入った技術系の専門商社で英語力が求められ、英会話学校に通って外国人の講師と話す機会を設けた。

その間、片道1時間半の通勤時間に TOEIC 単語集の音声を聞き、家



では映画のDVDを字幕なしで見た。2、3年後にTOEICのスコアは400点から780点に上がり、英語アレルギーは克服した。

海外に興味がわくようになり、パスポートを取得。プライベートで休みに海外へ行くようになった。アジアやヨーロッパに出かけ、文化にふれたり、現地の人と話したり。

仕事の対応は英語でこなしているが、悩みの種はスモールトークとよばれる雑談だ。

「海外メーカーの技術者と1週間ほど地方出張に行くこともあり、食事のとき、だんだん話題がなくなってくる。先日は何とかサッカーの話題で乗り切りました」

「社長塾」でスピーキング力をブラッシュアップ

リスニング力、スピーキング力を伸ばすため、週に1度、早朝に開かれる「社長塾」に参加している。海外駐在経験もある社長の近藤宣之さんが講師だ。教材は同社の信条(クレド)の英語版やTOEICのSW(スピーキング/ライティング試験)対策の問題集だ。

抑揚に気をつけ、繰り返し声に出す。やさしい英語も口をつけて出な

いのは「音読が足りないから」と近藤さん。

長めの文章を含むクレドは、チャンク(語のまとまり)を意識して、どこで切るかを考えながら音読する。さらに、TOEICスピーキングテストの教材を使って、「45秒間」という限られた時間で言いたいことを伝える訓練もする。

トラブルに対応し、スモールトークにめげず、会社の研修に積極的に参加する。西端さんは日々の努力で英語表現力を磨いている。



近藤さん自ら英語で月1回会報を配信している。TOEICのスコアに応じて、褒賞金もある



チームごとに英語のレベルで対象者が変わる社長塾。今期はTOEIC 600点以上の社員だ